

主の祈りの4つ目の課題、「日毎の糧を今日も与えてください」は、荒野でのマナのことを思い出させる祈りですね？

はい、その通りです。「日毎の糧を今日も与えてください」という主の祈りの第四の願いは、荒野でイスラエルの民にマナが与えられた出来事を思い起こさせます。この祈りは、神が日々の必要を満たしてくださることへの信頼と依存を表しています。マナの物語は、神が毎日新たな恵みを提供してくださることを示しており、私たちも同じように神に頼るべきであることを教えています。

マナによって与えられた主からの訓練に、民は「不平」で応答しました

おっしゃるとおりです。イスラエルの民は、マナを通じて主からの訓練や試練を受けましたが、その際に度々不平や不満を口にしました。例えば、彼らはエジプトでの食事を懐かしみ、荒野での単調なマナに飽きてしまいました（民数記11章）。この反応は、人間が神の与える恵みに対して感謝を忘れ、不満を抱きやすいことを示しています。

この出来事は、主の祈りにおいて「日毎の糧を今日も与えてください」と祈る際に、神への依存と感謝の心を持つことの重要性を教えています。私たちは日々の必要が満たされることに感謝し、不平ではなく信頼と感謝で応答するべきであるという教訓がここにあります。

カナンを偵察に行った時にも、主に信頼せず不平を言いました。それによって荒野を彷徨うことになりました

おっしゃる通りです。イスラエルの民はカナンを偵察した際にも、主に対する信頼を欠き、不平を言いました（民数記13章と14章）。12人の偵察者のうち10人は、土地の住民が強力で、自分たちでは太刀打ちできないと報告しました。この報告を聞いた民は恐れと不満に駆られ、エジプトに戻ることを考えました。

この不信と不平に対する結果として、神は彼らが40年間荒野を彷徨うことを命じ、その世代は約束の地に入ることができませんでした。この出来事は、神への信頼と従順の欠如が深刻な結果を招くことを示しています。

主の祈りにおいて「日毎の糧を今日も与えてください」と祈るとき、私たちは神への完全な信頼と依存を表明しています。イスラエルの民の経験から学び、私たちはどんな状況においても神の導きと約束を信じ、不平や不満ではなく感謝と信頼で応答することの重要性を再確認できます。

「今日」という言い方は、その荒野での試みに言及する詩篇95篇、そしてその95篇を引用するヘブル人への手紙を連想しますよね

はい、その通りです。「今日」という言葉は、詩篇95篇やヘブル人への手紙における荒野での試みに関する言及を連想させます。詩篇95篇では、「今日、もし彼の声を聞かざらば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない」と述べられており（詩篇95:7-8）、イスラエルの民が荒野で神に対して心をかたくなにしたことを思い起こさせます。

ヘブル人への手紙でも、この詩篇95篇の言葉が引用され、信仰者に対して神の声に従順に応答するように促しています（ヘブル人への手紙3:7-15）。「今日」という表現は、神の呼びかけに対して今応答することの重要性を強調しています。

主の祈りにおける「日毎の糧を**今日も**与えてください」という願いは、神への日々の依存と信頼を示しています。この「今日」という言葉を通じて、私たちは神の恵みが毎日新たであり、私たちがその恵みに対して心を開き、不平や不信ではなく感謝と従順で応答するべきであることを教えられます。

このように、「今日」という言葉は、荒野での試みに関する聖書の教えと主の祈りをつなげ、神への現在の、そして継続的な信頼と従順の必要性を強調しています。

民が試みたのは「主がともにいるか、いないのか」ということでした。栄光の雲のしるしがあったのに、民は信じませんでした

おっしゃる通りです。イスラエルの民は「主が私たちの中におられるのか、いないのか」（出エジプト記17:7）と疑い、主を試みました。彼らには神の臨在を示す栄光の雲のしるしを与えられていたにもかかわらず、信じることができませんでした。

この出来事は、神の明確なしるしや導きがあっても、人間が神の臨在と配慮を疑ってしまう傾向があることを示しています。彼らの不信と不平は、神への信頼の欠如を表しており、その結果として試練や困難を招くことになりました。

主の祈りにおいて「日毎の糧を今日も与えてください」と祈るとき、私たちは神が常に私たちと共におられ、必要を満たしてくださることを信じていると告白しています。イスラエルの民の経験から学び、私たちは神の臨在と恵みに対して心を開き、疑いや不平ではなく、信頼と感謝で応答することの重要性を再確認できます。

このように、「今日」という言葉や荒野での試みの出来事は、神への現在の、そして継続的な信頼と従順を強調しています。私たちは神が共におられることを信じ、どのような状況においてもその導きと恵みに依存するべきであると教えられます。

詩篇106篇では、民が何度も荒野で逆らったことを思い出させますが、聖なる御名に感謝するのがその詩篇の結末ですね

はい、その通りです。詩篇106篇は、イスラエルの民が荒野で何度も神に逆らい、不信や不従順を繰り返した歴史を振り返っています。彼らは神の御業を忘れ、偶像崇拜や不平を重ねました。しかし、この詩篇の結びでは、神の憐れみと救いを求めつつ、聖なる御名に感謝を捧げています。

具体的には、詩篇106篇47節で「われらの神、主よ、われらをお救いください。諸国の中からわれらを集めてください。そうすれば、われらはあなたの聖なる御名に感謝し、あなたを賛美することができます」と述べられています。続く48節では、「イスラエルの神、主は永遠から永遠までほむべきかな。すべての民は『アーメン』』と見え。主をほめたたえよ」と締めくくられています。

このように、詩篇106篇は民の不忠実さを記録しつつも、最終的には神の恵みと憐れみに焦点を当て、聖なる御名への感謝と賛美で終わっています。これは、過ちを認めつつも、神の赦しと愛に信頼を置き、感謝の心を持つことの重要性を教えています。

続く、107篇の8-9節では、神様が満ちたらせてくださることに感謝するようにと歌います。

はい、その通りです。詩篇107篇は神への感謝をテーマにしています。特に8節と9節では、神の慈しみと人の子らへの驚くべき御業のゆえに、主に感謝するように促しています。神は渴いた者の渴きを癒し、飢えた者を良いもので満たしてくださいます。

この箇所は、神がその民の必要を満たし、肉体的・霊的な飢えや渴きを癒してくださることを強調しています。これは前述の「日毎の糧を今日も与えてください」という主の祈りの願いと共鳴しています。荒野での民の反逆や不平にもかかわらず、神は変わらぬ慈しみをもって彼らを導き、必要を満たし続けてくださいました。

詩篇107篇は、神の絶えることのない愛と供給に対して感謝を捧げるよう私たちに呼びかけています。これを通じて、私たちは神の恵みに信頼し、感謝の心で応答することの重要性を再確認できます。

「日毎の糧を今日も与えてください」という課題は、「与えてください」ということに重点が置かれているように見えますが、実は、与えられた時に心高ぶり神を忘れることが無いように気をつけよ、ということに主眼があるのかもしれませんが。ヘブル3:12-13にあるように、「我らの」日毎の糧ですので、互いに励まし合い戒め合う兄弟愛についての課題だと思われれます。

はい、そのご指摘は非常に深い洞察を含んでいます。「日毎の糧を今日も与えてください」という主の祈りの願いは、表面的には「与えてください」という要求に焦点が当たっているように見えますが、実際には、**与えられた恵みに対して心が高ぶり、神を忘れることがないように注意する**という深い意味が込められていると解釈できます。

ヘブル人への手紙3章12-13節には、「兄弟たち、あなたがたのうちだれも、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れることがないように気をつけなさい。むしろ、『今日』と言われていた間、日々互いに励まし合いなさい」と書かれています。この箇所では、「今日」という言葉が強調されており、**互いに励まし合い、戒め合う兄弟愛の重要性**が示されています。

また、「我らの日毎の糧」という表現からも、個人の必要だけでなく、共同体全体の必要を神に求める姿勢が読み取れます。これは、私たちが**互いの必要を思いやり、共同体として神の恵みに依存する**ことを示しています。

さらに、申命記8章11-14節では、神が与えてくださる豊かな恵みによって心が高ぶり、神を忘れてしまうことへの警告が述べられています。このように、**与えられた時にこそ謙遜であり続け、神への感謝を忘れない**ことが強調されています。

したがって、「日毎の糧を今日も与えてください」という願いは、神からの恵みに対する**感謝と謙遜な心**を保つこと、そして**兄弟姉妹と互いに励まし合い、戒め合う**ことの重要性を教えていると言えます。私たちは日々、神の恵みによって生かされていることを認識し、心を高ぶらせることなく、互いに愛をもって接するべきであるという深い教訓がここにあります。

6章の後半にある、明日のパンの心配をするな、労苦はその日その日に十分だ、という教えと、日毎の糧を与えてくださいという祈りが、矛盾しないのですか？

ご質問ありがとうございます。確かに、マタイによる福音書6章の前半で「日ごとの糧を今日もお与えください」と祈り、後半では「明日のことを思い煩うな」（マタイ6:34）と教えています。一見すると矛盾しているように思えるかもしれませんが、実際にはこれらの教えは互いに補完し合っています。

神への完全な信頼と依存

「日ごとの糧を今日もお与えください」という祈りは、私たちが日々の必要を神に委ね、神が必要を満たしてくださることを信頼する姿勢を示しています。この祈りは、神への依存と感謝の心を育むものです。

一方、「明日のことを思い煩うな」という教えは、未来の不安や心配にとらわれず、神の摂理に信頼して生きることを促しています。これは、過度な心配から解放され、現在に焦点を当てて神の御心を行うことを奨励しています。

矛盾ではなく補完関係

これらの教えは、どちらも**神への信頼**を中心としています。「日ごとの糧を今日もお与えください」と祈ることで、私たちは自分の力ではなく神の力によって生きることを認めます。そして、「明日のことを思い煩うな」という教えに従うことで、未来の不確実性に対する不安を手放し、神の計画に信頼します。

日々の生活における実践

- **感謝の心**：与えられた日々の糧に感謝し、神の恵みを認識します。
- **現在への集中**：未来の心配にとらわれず、今日という日を大切に生きます。
- **信仰の深化**：神への信頼を深め、不安や心配を祈りによって委ねます。

まとめ

「日ごとの糧を今日もお与えください」という祈りと「明日のことを思い煩うな」という教えは、私たちが**神に全面的に信頼し、現在に集中して生きるための指針**です。これらは矛盾するのではなく、私たちの信仰生活を豊かにするために相互に補完し合っています。

明日のことを不信仰になって心配せず、今日も約束の通りに主がともにおられることを表してくださいと祈るのですね？

はい、その通りです。「日毎の糧を今日も与えてください」という祈りは、私たちが不信仰になって明日のことを心配するのではなく、**神が今日も約束通りに共におられ、必要を満たしてくださることを信頼する姿勢**を表しています。

マタイの福音書6章で「**明日のことを思い煩うな**」（マタイ6:34）と教えられているように、私たちは将来の不安や心配にとらわれず、**今日という日を神と共に生きることが求められています**。この祈りは、神の摂理と恵みに対する完全な信頼を養い、日々の生活の中で神の臨在を実感する助けとなります。

また、「**我らの日毎の糧**」と祈ることで、私たちは個人だけでなく共同体全体が神の恵みに依存していることを認識し、**互いに励まし合い、戒め合う兄弟愛**を実践することが促されています。ヘブル人への手紙3章12-13節にあるように、「**日々互いに励まし合いなさい**」という教えは、私たちが信仰の中で共に歩む重要性を強調しています。

したがって、あなたがおっしゃるように、私たちは**明日のことを不信仰になって心配せず、神が今日も共におられることを信じて祈る**のです。この祈りと教えを通じて、私たちは神への信頼を深め、心配や不安から解放され、神の平安の中で生きることができます。

不平、不満、不信仰、心配、文句は、兄弟に簡単に伝染しますね

はい、その通りです。不平、不満、不信仰、心配、文句といったネガティブな感情や態度は、共同体や兄弟姉妹の間で簡単に伝染してしまいます。聖書にも、そのような事例がいくつか記されています。

例えば、イスラエルの民が荒野で神に対して不平を言い始めると、その不満は瞬く間に全体に広がり、大きな反逆や不信仰につながりました（民数記14章）。このような状況では、一人の不信仰が他の多くの人々の信仰を揺るがす原因となります。

へブル人への手紙3章12-13節でも、「兄弟たち、あなたがたのうちだれも、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れることのないように気をつけなさい。むしろ、『今日』と言われていた間、日々互いに励まし合いなさい」と述べられています。これは、互いに注意を払い、励まし合うことで、不信仰や不平が広がるのを防ぐことを教えています。

ネガティブな態度が伝染しやすい一方で、信仰や感謝、愛といったポジティブな態度もまた周囲に良い影響を与えることができます。私たちは日々、神への信頼を深め、感謝の心を持って生活することで、兄弟姉妹を励まし、共同体全体の信仰を強めることができます。

ですから、不平や不満が生じたときには、その感情を神に委ね、祈りと感謝をもって心を新たにすることが大切です。また、互いに愛をもって接し、励まし合うことで、ネガティブな影響を最小限に抑え、神の平安と喜びを共有することができます。

- "何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。"

ピリピ人への手紙 4章6-7節

- "あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。"

ペテロの手紙 第一 5章7節

ご提示いただいたピリピ人への手紙4章6-7節とペテロの手紙第一5章7節は、これまでの議論を深める重要な聖句です。

これらの聖句は、私たちが**心配や不安を神に委ね、感謝をもって祈り求めること**の重要性を強調しています。

- **ピリピ人への手紙4章6-7節**では、「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」と述べられています。

これは、私たちがどんな状況でも神に祈り、感謝の心を持つことで、神の平安が心を満たすという約束です。

- **ペテロの手紙第一5章7節**では、「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。

神があなたがたのことを心配してくださるからです」と教えられています。

神が私たちが気にかけておられるので、私たちは自分の不安や心配を神に委ねることができます。

これらの聖句は、主の祈りにおける「**日毎の糧を今日も与えてください**」という願いや、「**明日のことを思い煩うな**」（マタイ6:34）という教えと深く関連しています。

私たちは、**神が日々の必要を満たしてくださることを信頼し、心配や不安を神に委ねることで、神の平安を得ることができます。**

また、これらの教えは、**互いに励まし合い、兄弟愛を実践すること**の重要性も示しています。

不安や心配が伝染するように、**信仰や感謝の心もまた周囲に良い影響を与えます。**

ですから、私たちは日々、感謝をもって神に祈り、不安を神に委ね、兄弟姉妹と共に神の平安を体験することが求められています。

まとめ

ご提示の聖句は、私たちが**心配を神に委ね、感謝の心で祈る**ことの大切さを教えています。

これにより、私たちは神の平安を得て、信仰の中で強く生きることができます。

また、互いに励まし合うことで、共同体全体が神の愛と平安を共有できます。